

看護職の性の健康支援態度尺度の開発

埼玉県立大学大学院 保健医療福祉学研究科 博士論文

指導教員：鈴木幸子教授 兼宗美幸教授 北島義典教授

2023年3月

2291003 服部 弓子

1. 研究の背景

性の健康を得ることは、人間の基本的な権利のひとつと言われ、男女の違いに限らず、幅広い年代にとって重要な意味を持つ。性の課題は健康に様々な影響をもたらすが、性的な話題はタブー視されることが多く羞恥心を伴うため、対象者が自ら訴えることは少ない。支援者側も性的なことに配慮するあまり関わることを躊躇し、支援に結びつきにくい。さらに、何が性の健康を守るための看護職の支援となりうるのかが不明瞭であり、看護実践の適切性を議論することが難しいことから、性の健康が享受されづらい状況が生じている。

性に対して人がどのような価値観や信念を持つのかを知るために、性に対する態度尺度を開発する研究が行われてきたが、個人の知識や態度はそのままで看護実践に結びつかないことも明らかにされている。国外では性の健康を支援することに対する支援者の態度を測定する用具が開発され、性の健康支援の実態調査や支援者への教育に役立てている。日本においても性の健康支援を促進するために、性の健康支援に対する態度を測定し、その結果を用いた教育を検討する必要があると考える。しかし、日本には適切な測定用具が開発されていないばかりか、性の健康支援に関する研究が少なく、性の健康を守る支援の概念も曖昧である。そのため、看護職の性の健康支援に対する態度や性の健康支援を行うための教育内容を評価することが困難となっている。

以上のことから、「性の健康を守る看護職の支援」という概念を明らかにしたうえで、看護職の性の健康支援に対する態度を測定する尺度を開発する必要がある。

2. 研究 I

1) 目的

「性の健康を守る看護職の支援」の構成概念を明らかにする。

2) 方法

Walker & Avant (2005/2008) による概念分析の手法を用い、日本の看護職による性の健康に関わる支援について記載されている研究論文 33 件と、その内容の不足を補うために健康な対象への性の健康支援を行う助産師 11 名へのインタビューデータをもとに、概念を定義づける属性と先行要件、帰結を抽出した。

3) 結果及び考察

「性の健康を守る看護職の支援」の属性は、【性に関わる言動を表出することを支援する】【自分自身の性を肯定的に受け止めることを支援する】【性に関わる意思決定をすることを支援する】【性の健康問題をセルフケアすることを支援する】【性的プライバシーを守り傷つきの深まりを予防することを支援する】【性を楽しむことを支援する】という 6 カテゴリーの構成概念に集約された。その先行要件には、【性の健康に関わる課題を持つ対象者の状況】【性の健康を支援する看護職の認識】の 2 カテゴリー、帰結には、【対象者に性の健康を守る力がつく】【対象者が自分らしい性のあり方を目指す】【対象者の性の権利が擁護される】の 3 カテゴリーが抽出された。

性の健康を守る看護職の支援は、対象との関係が壊れないように留意しながら相談しやすさを作り、対象自身が自分の性を肯定的に受け止めることや、性の健康に関わる意思決定とセルフケアできるようになるための支援であった。また、支援により対象自身に性の健康を守る力がつくこと、自分らしい性のあり方や、人の根幹にかかわる人権の擁護を目指すことが明らかになった。

3. 研究Ⅱ

1) 目的

看護職の性の健康を守る支援への態度を測定する尺度を開発する。

2) 方法

研究Ⅰで明らかになった「性の健康を守る看護職の支援」の 6 つの構成概念を基に質問文を考案し、専門家会議とプレテストによって、内容妥当性と表面妥当性を吟味した。

本調査の対象は、就業して 1 年以上の保健師・助産師各 100 名、看護師 300 名であり、Web 調査を利用した。調査項目は研究対象の属性（今現在の職種・看護職としての合計就業年数・性の健康支援に影響する学習経験の有無・性別・年代・結婚の有無・

子の有無)、ならびに「看護職の性の健康支援態度尺度原案」である。さらに、基準関連妥当性の検討に用いるため『セクシュアリティに対する態度尺度 (朝倉, 2002)』についても調査を行った。

3) 結果及び考察

質問文は、“支援ができそうか”という見通しや確信である自己効力感で態度を測定する文章を考案し、専門家会議とプレテストによって内容妥当性と表面妥当性の確保に努めた。最終的に 53 項目からなる「看護職の性の健康支援態度尺度原案」となった。各項目は 5 段階のリカートタイプの選択肢とし、得点が高いほどそれらの支援が「できそう」と認識していることを表す。

分析対象の看護職は 481 名 (保健師 95 名・助産師 99 名・看護師 287 名) であり、看護職としての合計就業年数は 1 年以上 10 年未満が 31.2%、10 年以上 20 年未満が 31.8%、20 年以上が 37.0%であった。性別は、女性が 89.6%、男性が 10.4%であり、30 歳代・40 歳代の参加者が各々 30%以上であったが、50 歳代以上も 24.9%いた。性の健康の支援のために役立ったと認識する学習経験は無しと答えたものが 70.5%であり、既婚者は 71.1%、子どもがいる対象は 57.6%であった。本研究の参加者は母集団である日本の看護職の職種構成割合と異なるが、少数派である保健師や助産師の意見も取り入れることができた。また、幅広い年代の参加者を得ることができ、年代による性の健康支援に対する感じ方の違いを包含することができたと言える。

「看護職の性の健康支援態度尺度原案」は、記述統計量による項目分析と、修正済み項目合計相関 (I-T 相関) によって質問項目を選択した。さらに因子数は固有値が 1 以上として主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を行い、最終的に 4 因子 24 項目とした。因子はそれぞれ [性に関わる意思決定のための支援] [性に関わる障害の受け入れのための支援] [性的な暴力の被害者を守るための支援] [性的プライバシーを守るための支援] と命名した。

尺度全体の信頼性係数は、Cronbach's $\alpha=0.952$ であり、第 1 因子 $\alpha=0.923$ 、第 2 因子 $\alpha=0.916$ 、第 3 因子 $\alpha=0.897$ 、第 4 因子 $\alpha=0.836$ と高値であった。また、尺度全体とそれぞれの因子との相関係数は、 $r=0.892\sim 0.758$ ($p<0.01$) であり、高い相関が確認された。4 つの因子同士の相関係数は、中程度の相関関係 ($r=0.739\sim 0.471$, $p<0.01$) にあることが確認された。I-T 相関は $r=0.536\sim 0.733$ ($p<0.01$) であり、これらのことから、内的整合性を確認した。

構成概念妥当性の検討として、まず因子分析の結果を確認した。探索的因子分析の結果、看護職の性の健康支援態度尺度 4 因子 24 項目で、全分散を説明する割合が 61.65%であった。確認的因子分析の結果は、GFI=.865、AGFI=.836、CFI=.920、RMSEA=.075 であり、許容範囲を示す適合度が確認された。

第 3 因子に「性的な暴力の被害者を守るための支援」が構成されたことから、配偶者等からの暴力の被害者への支援は特別なものではなく、日常的な性の健康を守る看護職の支援内容として位置づけられていることが明らかになった。一方、【性に関わる言動を表出することを支援する】と【性を楽しむことを支援する】というカテゴリから考案した項目については、下位尺度として構成されなかった。看護職は、対象への関わりにおいて支援者として拒否されないように性に関わる言動を表出していた。しかしながらこれは性の健康支援に限った特徴的な支援ではないことから、1 つの因子として構成されなかったと考える。また、対象が性の喜びや楽しみを得るための工夫に関わる支援に関連した項目は、尺度として十分に表現されるに至らなかった。対象が性の喜びや楽しみを得るための悩みに対応することが看護職の支援として認められず、本項目が看護職の性の健康支援態度の下位尺度として構成されなかったのだと考える。

また、看護職の性の健康支援態度尺度 4 因子 24 項目は、平均得点 87.53 (SD±15.88) であった。職種別にみると助産師、保健師、看護師の順に平均値が高かった ($p<.001$)。既婚者 ($t=-3.155$, $df=200.274$, $p=.002$)、子どもがいる者 ($t=2.986$, $df=377.377$, $p=.003$)、性の健康を守る支援に影響したと思われる学習経験が有ると認識した者 ($t=6.817$, $df=479$, $p<.001$) の方が、そうでない者と比べて得点が高く、先行研究を支持していた。これらのことより、構成概念妥当性が確認できた。

基準関連妥当性の検討のために用いた『セクシュアリティに対する態度尺度』と本尺度得点間には弱い相関 ($r=0.223$, $p<.01$) を認めた。先行研究ではセクシュアリティに対する態度と性に関するケアの必要性の認識は正の相関を示したが、必要性の認識と本研究の支援行動ができそうかどうかという自己効力感の間には隔たりがあり、弱い相関にとどまったと考えられる。

以上の考察から、看護職の性の健康支援態度尺度は、性の健康支援の現状を評価するだけでなく、性の健康支援を積極的に実践できる看護職を育成するための教育内容の検討や、看護実践の現場における性の健康支援の促進と発展にも寄与することが期

待できる。

4. 本研究の限界と今後の課題

尺度開発の調査が Web 調査の対象に限定されたこと、基準関連妥当性の検討に際して適切な日本語尺度がなかったこと、再テスト法による確認をしていない限界がある。性の健康支援の促進に貢献するために、時代背景をふまえた性の健康支援のあり方を検討し、尺度としての改良を重ねることが課題である。